

徳平が所帯を持った初めの頃、かみさんはおとなしくて黙々とよく働いたが、年を重ねれば重ねるほどにその口はよく動くようになっていった。その大きな口からは冗談も出るが、時には辛らつな意見や嫌味も飛び出す。

かみさんはとくに八百屋の商売を見限り、今は隣のクリーニング工場でパート勤めをしていて、午前十時から午後四時まで働いている。クリーニングの仕事で太い腕が益々太くなっていくのはしかたがないとしても、パートから帰ると、残っている野菜類をうんざりした顔で見詰め、膨れっ面をして文句を言い始めるのだ。

「あんたね、最後の客が来たのはいつかの？」
この嫌味は毎回聞き捨てならなかった。

というベストセラ―本を読んどらん。粗食でええやないか。だいたいわしら、年寄りにどれほどのカロリーがいるんや。二人して棺おけに半分足を突っ込んでる身や。精進料理で結構や」

昼食にはカツ丼やハンバーグなどの油モノをたっぷりと摂って胸も腰も厚くなっているかみさんが両手を腰に当てた。まるで達磨そっくりの風体だ。
『粗食のすすめ』やなんて戦前の修身の教科書と違うか。あんたはそれでええやろうけん、あたしはごめんや。あたしはまだ若いし百歳まで生きるつもりやけん」

かみさんはそう言い捨てて奥に入ってしまった。
徳平は声には出さず、口だけ動かして（なにが『あたしはまだ若い』や。だいたいあの年でパートに出て

「ほれ、昨日は二人きたんをしつとるくせに。栄屋の栄治さんと隼人のおつかさんや」

徳平は大声を出した。声の大きさを勝負だ、と仕掛けてみるのだがかみさんの方の声がいつも一オクターブ高かった。

「あの栄屋はおまえさんを将棋指しに誘いに來ただけやなかったかの。あのオヤジの頭そっくりの玉ネギの一個でも買うていったか」

ここで早くも徳平は手詰まりになった。

「ふん、毎日、毎日しなびた野菜を工夫して料理する身にもなってみまい。あああ、あたしや、あきあきしでもうた。夕食がいつも精進料理やけん」

この言葉で次の一手が思いついた。

「おなごはこれだから浅はかなんや。『粗食のすすめ』

いる婆さんがどこにおるんや。ここの婆さんくらいやで。まあ、家計は助かつとるからありがたいがの、あの口の悪さで帳消し」と愚痴をこぼしていると、さつとすりガラス戸が開いてかみさんが再び姿を現した。

徳平は声に出さなかったはずなのに、以心伝心で聞こえてしまったのかときよつとした。

かみさんは脱いだつっかけを再び履いて徳平の側に寄って來た。そして声のトーンを落として言った。

「な、あんた。せんから言おうと思とったことやけど……今さっき話に出た栄屋の栄治さん、ちーとたそがれてきとることはないかい？」

『たそがれとる』？ いったいなんのこっちゃ」
するとかみさんは徳平のやせた尻をつねった。

古女房に尻などつねられても少しも嬉しくない。痛いだけだ。

「ちよつと、あんた、とぼけんといてや。栄治さん、ちよつと前からおかしいやないか。今はなんと言うのかの。』もうろくする』ではなくて『たががはずれる』でものをうて……。そや、『認知症』ちゆうもんになりかけてないかの」

徳平は大いに憤慨してみせた。

「そんなことはない。わしの友だちに失礼なことを言うたらいかん。栄治さんは将棋を指してもしつかりしたもんや」

かみさんは疑わしそうな顔つきをして、薄暗くなった店の電灯のスイッチを押した。色の悪い蛍光灯の光に照らされると、情けないことに野菜はますますしな

びて見えた。

「三年前に栄治さんはおかみさんを病気で亡くしたやろ。あれが精神的にうんとこたえたんと違うか。あそこの夫婦は同じ年やったから、おかみさんが亡くなつたのは七十一だったやろ。まあ、七十一歳で逝つてしまふとは今では早すぎるし、それにあそこは夫婦仲が良かったから、栄治さんの落胆振りには心が痛かったわ。年をとつてひとりぼっちになるとほんまに寂しいもんや」

徳平も小柄でやさしかった栄治のおかみさんが亡くなった時のことを振り返ると、やりきれないものがある。

徳平と栄治はこの夕焼け通り商店街で同じ苦勞をして店を建て直し、同じようにかみさんと一生懸命に

働き、同じように一人息子を授かったのだ。そしてそれぞれの子に清と祐一と名づけた。徳平と栄治は子どもがたくさん欲しかったが、生憎と恵まれなかった。

しかしその後、二人共に商売が猛烈に忙しくなり、ひとりむすこじゅうざんと思つようになったのである。それぞれの息子の清と祐一は親と同じ梅島小学校に通つた。清がすぐに泣き喚き、教室を飛び出てしまふ落ち着きのない子だったのに対して、栄屋の祐一はおとなしいが芯が強く、問題など決して起こすような子どもではなかった。徳平は同じような環境に育つたのに二人がどうしてこんなに個性が違うのかと不思議でしかたがなかった。

さらに不思議といえは、徳平と栄治は性格は違うものとても気が合ったのに、息子たちは互いにまった

く関心がなく、家が近いのに交友もなかったことだ。

清は高校の途中で家出をしたが、祐一は一番の成績で高校を卒業し、東京の大学に進み、大学卒業後は東京の銀行に就職をした。栄屋の栄治は息子に酒屋を引き継いでほしかったが、小売業の暗い将来を見据えると、サラリーマンになったほうがいい、とあきらめたのである。それに高海市は瀬戸内海の玄関と呼ばれていて、多くの会社の支店があり、祐一もいづれは高海に転属になって、その時には一緒に住めるかもしれないという希望を抱いていた。

しかし祐一は初任者研修を終えた後の初出勤日に、通勤電車の衝突事故で亡くなったのであった。

徳平はその時ほど人生の不条理さを感じたこととはな

かった。まして息子に先に逝かれた父親の栄治の気持ち
はどれほどか、と察するといつも落ち着かない気持ち
ちになったものだ。

しかし栄屋の栄治は気をしっかりと持ち、悲しみを
押し隠し、大勢の葬式の参列者の中にあっても気丈に
振る舞ったのであった。三年前におかみさんを亡くし
た時も喪主となつて、憔悴してはいたが、落ち着いた
態度で涙ひとつ見せずに立派に葬式をやりとげた。そ
んなしつかりとしていた栄治がもうろくするなんてこ
とがあつてたまるもんか、と思う一方、徳平は最近、何
か引つ掛かるものを感じていたのである。

「なあ、あんた。黙り込んでどしたんか」

かみさんの声に徳平は、はつと考え事から醒め、い
かにも確信がありそうに言った。

が、かみさんが言ったことは徳平も心密かに心配して
いたことだった。商店街の噂は徳平の耳にも入って
きていたし、何よりもあんなに将棋に強かった栄治が
最近、つまらないミスでポロリポロリと徳平に負け始
めたのだ。

かみさんの話を聞いて居ても立つてもいられなく
なつた徳平は、「あんた、どこへ行くんな」というかみ
さんの声を後ろに聞きながら、店をほつたらかしにし
て栄治の様子を見てくるために栄屋に向向いた。出向
いたと言つても栄屋は八百徳の数軒西隣りにあるの
で歩いて数分とかからない。

ここの畳屋も、次の左官屋も、その次の紙屋もみん
ないなくなつて、ふつうの民家になつとるな、とちら
りと横目で見ながら急ぎ足になつた。その二軒先が

「そりや、一時はわしも心配したほど栄治は落ち込ん
どつた。けど段々にもとに戻つたやないか。今は普通や。
わしは栄治とは幼馴染みで、あれのことは誰よりもよ
うに知つとる。わしとは違つて小さい時から勉強が
ようでけて、小柄やつたが体力はあつたし、頼りがい
があつた。あれは元々しつかりしとる男や。ちつとや
そつとのことではこたれんわい」

「ほんまか？」

「ほんまや」

「だけど、夕焼け通り商店街のみんなは噂しとるん
で。栄治さん、ちよつと前からぶつぶつと独り言を言う
ようになつたつて。自動販売機や交通標識に向かつて
話しかけるんや。それはおかしいと思わんか」

徳平は再び黙り込んだ。誰にもしやべつてはいない

栄屋である。

いつの間にか灰色の雲が空をおおい、薄暗くなつた
商店街に外灯がぼつり、ぼつりと点き始めた。バイク
や自転車の灯りが商店街をせわしげに行き交つてい
た。

今の時間に行つても栄屋には客は誰も来ていない
はずだ。というのも酒店も徳平の八百屋と同じように
時代の波に呑まれていつたからだ。

(以上2月13日放送分)